機械作用と身體の個性（中）

大西友太

一〇

凡て物の構造には內面的全體がなければならぬ。二つの感覺の結合するにはその內面にこれを包括し得るところの大きな根抵がなければならぬ。感覺の結合は只この場合にのみ考へられる。有理數の內面にある無理數によつて有理數の連續的體系が作られるやうに、感覺はこの內面に於てこれに映して居るところの全體的根抵によつて結合せられて一つの體系となる。感覺の幾何學がこれであることは私の既に述べたるところであつて、この幾何學の特徵は何處までもこの內面的全體の創造的統一にある。ロッチェは意識の特徵を以て橫に無限に擴げられたる關係の網の如きものと考ふべきではなく、寧ろ多くの同時に響いて居る音から出來て居る一つの音樂の如きものであつて、或る音が太くなつたり細くなつたり、又高くなつたり低くなつたりしながら、凡ての他の響を調和的に移調せしめつゝ一つの運動系

列としてこれ自身で完結せる立派なるメロディーを作るにも似ると考へねばならないでないかといつて居るが、(一)感覺の幾何學はこのメロディーの流れの或る瞬間に於ける切斷面の如きものであつて、その內面的構造が形態心理學者のいふ Gestaltqualität であるべきことは私の既に述べたるところである。隨つてこの內面的構造にはその統一的中心の直接的內面的移動 die unmittelbare innere Wechselwirkungen selbst を內に成立せしむべき全體が働いて居らねばならぬ。この全體がフッサールの直覺的所與性の樣相の如きものでなければならぬことも私の既に述べたるところである、この樣相は超現象學的時間の叡知的空間に於ていはゞライプニッツの作られたる單子を無限に集合せる如きものとしてそれ自身無限に異なれる世界を內にもつものであつて、直接的相互作用の起こるのはこの叡知的空間に於ける異なれる世界としての單子の直接的內面的連續に於てゞあるから、その連續點に於ては異なれる世界としての單子を內に成立せしめて、これを創造的總合の立場に於て統一する全體が內に働いて居らねばならない。所が單子は元來この樣相に於て樣相を內にもつ全體の獨立世界であるから、かゝる全體はつまり樣相を全體とすれば、その全體の全體でなければならぬ。これが內界の事實として實在を自由に求め、その內面的構造を自

由に於てある樣相又は叡知的空間に求めねばならぬに至る所以である。

勿論この樣相は現象學的時間の體驗を超越してこれを內にもつ全體である。隨つて最早凡ての意味に於て時間的發展の秩序に於ける多樣であるといふことは出來ぬ。全くアリストートルの神に於てのヌースの多樣の如きものであるが、この多樣に於ける各點が獨立の世界としてライプニッツの單子の立場を徹底的に所有するためには、その內面的に於てある創造的總合としての全體は、總合的普遍としてシエリングの哲學で見るやうな固定的實在としての全體ではなく、創造の無限の可能を內にもつライプニッツの可能の自由としての全體であつて、その一義的自己規定の自覺に樣相に於てある一切單子の全體世界が生ずるものでなければならぬ。物の分析の極限に於て內に無限に打ち延ばしたる可能の自由に於ては、卽ち物の內面的直接的本質に於ては自己を見ることが一切を生ずることでなければならぬ。この點に於てフッサールの直覺的樣相が全體であるならば、この全體の中にある全體は可能の全體でなければならぬのであつて、こゝにライプニッツの無限の可能の自由が實在の最も直接的內面的完全者として考へらるべき理由がある。ヘーゲルでは自己同一性に於て自發的に發展する精神は認識の精神であるとするが、(二)自己に於

てその同一性を見る所の自覺の精神はライプニッツの哲學でいふならば可能の自由に當るものでなければならぬのであつて、この自由がその一義的限定に於て自己を見るとき、その自覺の中に凡ての實在及びその個別的差異を純粹形式で生ずる。カントが神の直觀ではその一切の對象を生ずると考へたのは、この可能の自由に於てゝなければならぬのであつて、直觀はこの可能の自由の一義的規定に於ける自覺的創造である故に、その樣相には內面に無限の差異を含み、無限の個別的實在の根源をその要素の一々に與へるのみでなく、樣相それ自身をもこの無限の可能の一つの實現とすることが出來る。後に述べる如く無限の個別的差異の發達と全體の豫定調和とはこゝに考へられるのであつて、內界の事實では所詮フッサールの直覺的樣相を內にもつライプニッツの無限の可能の自由を以て凡ての實在の根抵をなすべき眞の實在と考へねばならぬ。ライプニッツが神が創造以前に於てもつと考へた可能の全體としての自由こそは凡ての實在の中で假定のない眞の實在である。これが內に無限の關係を見ねばならぬ物の分析の究竟的歸結であつて、存在は凡て自由の一義的規定の創造的總合に於てある點に於て本來具體的全體的である。存在は分析的普遍の一般的抽象的立場にあるものではなく、總合的普遍の具體的立場に

あるものであつて、分析の可能は既に述べたるごとく總合的普遍の具體的全體を豫想し、結局ライプニッツの可能の自由を豫想せねばならぬのである。自由に於て實在は最も具體的であつて、その中には一切の實在の可能がある。實在を關係に於て求めるロッチェが自由に於てある空間性を以てその典型と考へたことは物の分析からいつて形而上學的に深き理由のあることであつて、前に述べた形態心理學者のGestaltqualität に關する問題も結局この自由に於てある空間性の問題に歸着せねばならぬ哲學上の理由がある。

一體もと關係といふことはアプリオリの關係である。隨つて自由でなければならぬ。可能を內にもつライプニッツの自由でなければならぬ。スツムプやゲルブの所謂關係の體驗の如きものも結局この可能の自由に於て見る體驗でなければならぬ。エーレンフェルスのいふところによるときは、構造心理學に於けるGestaltqualität は積極的表象內容であるといふことである。ビューラーはこれに對して說明を加へ、吾々は例へば音の感覺の雜群をもつて居ると共に、なほこれよりも以上に意識內容をもち、その單純なる雜音の感覺に何物か新しきものを加へる。この新しき意識內容をGestaltqualität といふのであるが、この場合に新しき感覺が外から加はつたの

ではないから、この內容は第三感覺ではない。スツムプやゲルブのいつて居る關係の體驗の如きものでなければならぬといふ意見から、注意や統覺に論及し積極的表象內容のことを說明して居るが、(三)ヴントの總合內容統一の統覺に Gestaltqualität を求めるにしても、矢張意志の自由といふ立場に於てフッサールの直覺的樣相を內にもつライプニッツの神の自由に到らねば、その說明は徹底せぬであらう。關係の體驗の內面に於てはライプニッツが神に於て無限の可能があるといつた可能の自由がなければならぬ。この自由の直覺的樣相に於て普遍的全體と個別的特殊との關係が最も具體的に直覺せられ、自由が樣相に交叉する一義的規定に於て凡ての實在が內界の事實として最も具體的に創造せられる。認識と實在との原理が絕對實在に於て一致するといふことはアリストートルのプラトーに一致するところであつて、プラトーがイデヤの先驗から物を見たのに對して、アリストートルは物の分析からその最高の原因に達し、これを具體的個性的活動的實在と呼んだ。形式がこれであることはこゝで改めて述べる迄もないところである。而してこの形式が精神的方法で働く點からアリストートルは又これをヌース卽ち純粹なる叡知と呼んで居るが、この叡知にはなほその內面に於て可能の自由があるから具體的個別的活動的實在

たるを得るのである。一切が一切と一切の可能的關係に於て立ち、凡ての意味で創造の總合的普遍の内に機械作用の一般的普遍をもつ豫定調和の發達を見ることが出來るのである。分析的普遍ではなく總合的普遍の自由創造が一切の現實の根源である。ロッチェはライプニッツの形而上學に於て意志の自由に實在を求めた考へを批評して、神の悟性の直觀によつて所與の内容が規定せられ、意志によつてその内容の現實性が規定せられると考へるといつて居るが、(四)悟性の直觀は内面に意志の自由がある故に、直觀その物を生ずれば、又その内容が現實的具體的たるを得るのである。内容の創造を自由に於て見るのがライプニッツの哲學である。

ライプニッツは單子論に於て神を以て可能の中に於ける現實の根源であつて、神がなければ物の可能があつても現實にこれを見ることが出來ぬ。隨つて存在がなくなり、可能その物もなくなるであらうといつて居るが、(五)無限の可能を内にもち、隨つてそれ自身では如何なる可能でもない純粹なる可能の自由に於ては可能を超越し創造を超越して居るが、こゝに實在の凡ての條件を完備すべき最も具體的なる實在がある。元來物が存在するといふことは、何かといへば、ロッチェなどもいつてゐる如く凡ての關係の絶えざる變化を通じて確實に存在するからであるが、(六)これにはロ

ツチエがミクロコスモス及び形而上學を通じて高調して居るやうに、自覺に於て內に凡てを創造する自由のあることを豫想するのであつて、自由の一義的創造的總合が物の存在の初めである。凡ての物は特殊の存在に違ひなく、隨つて感覺はフッサールなどのいつて居る如く特殊の種類の體驗には違ひないけれども、その特殊の體驗の內面には一如の月とでもいふべき自由が照らして居らねばならぬ。特殊の種類の體驗を內に照らす直覺的樣相を又その內に照らす自由のあることを豫想するのであつて、この自由の一義的規定に於て自己が自己を見る直覺的自覺に於て、一切の關係を內にもつ一切の個性が生ずる。ライプニッツの自由こそは凡てゞあつて、純粹なるインテレクトとして働くところの substantia prima と呼ぶことが出來るであらう。分析上物の內面に於て凡ての極限を越えて無限に打ち延ばした自由では、理知の先驗を超越した偶然であるが、この自由が一切の可能を內に於てもつ全體である故に、その創造は個物を內面的必然的に一切の關係に置き、一切の可能的關係によつて一切に、一切の可能を實現せしむる。物は自由に於てある故に、內に總合的普遍の統一を有すると共に、外に凡ての必然的關係に於て立つ個性たるを得る。

ライプニッツはアーノールとの論爭に於て個性のことを論じ、個性概念は全體同

時的に凡ての自己に對して發生すべきものを包括して居らねばならぬと論じたるに對して、アーノールは若し個性概念が全體同時的に凡ての自己に對して發生するものを包括するものとするときは、神はアダムを創造するか否かについては自由であるけれども、一度アダムを創造すると決定したる以上は、その創造以來人類について發生したるもの及び將來發生すべきもの一切が必然的にアダムに發生もして居れば又將來發生もせねばならぬと論じて居るが、自由(七)の一義的限定的結合に於て個性的に特殊化せられ現實化せられるものは無限に多數であるが、一度或る物が創造せられるときはその個別的限定の中に一切の可能の自由が置かれ、個物は凡ての他のものと凡ての關係に於て限定的にこれを實現すべき立場に立つ。物は可能の自由に於てある故に現實の個別的存在の中に無限の發達の可能を藏するのみでなく、その一つの發達は自由に於ては內面的必然的に次ぎの發達を起こし、その發達の中に異なる形式でその前の發達を含み、つまり凡ての過去をもつと共に凡ての未來をもつを得る。この過去と未來の一つに重なつた現在では、凡ての意味で同時的全體的である。個性の現在は絕對である。私はこれだけのことがこの問答の中に含まれて居るものと考へる。神の創造は單子に於てゞあつて、この單子は神に於てそれ

〻〻獨立の實在的要素として既に述べたる如くいはゞ叡知的幾何學的體系を作り、この體系に於て神の創造的總合によつて普遍的に統一せられると共に、その統一に於てある自己の內面に神の一切の可能を映して居る。一切が豫定調和に於て立つと共に、一切と一切の關係を結ぶのはこの單子に於てゞあつて、神は單子を創造する點に於て一の單子と一切の關係に於て立つべきことを一切の單子に命じ、一切の創造されたる單子は限定的に可能の自由をその內面に於てもち、獨立の世界となるといふのがライプニッツの思想であるが、物はその分析の極限に於て承認さるべき自由に於てある點に於て正にこの單子であつて、その總合的普遍に於て見る內面的統一では自由が自由を見る故に、一切の可能的存在が同時的に創造せられ、一切の可能的秩序を自覺に於てもつ全體的調和の個別的世界が見られる。この點に於て自由の創造的總合の統一では、一切の關係を單子に於ての如く物は表象關係に於てもち、一切を表象することによつて實在體系を作り、自覺的に一切の可能的關係を實現する所にその本質を有するといへる。

この點卽ち物は自由に於てあるライプニッツの單子であるといふ點に於て人格的實在であるといへる。自覺的實在であるといへる。前に述べたコーエンの〔illegible〕の

内面において考へらるべき實在はこの自由に於てある人格でなければならぬのであつて、先驗的分析のイデヤたるべき元素は凡ての關係を超越し、凡ての働きを超越してこれを内に於てもつ自由の創造的總合に於てある點に於て、物はそれ自身人格として究竟的に連續すると共に、凡ての働きを内にもつ獨立體であるといへる。私は物のこの性質を明かにするため前に述べた$y=f(x)$について考へを進めて見ようと思ふ。既に述べたやうにこの方程式に於て既成數としてのyの數系列から見るときは、一般的必然的因果關係によるものであるが、未知數xの内面にはこのyの數系列を可能的系列の一つと見るべき全體をもつて居る。この數系列を作るか否かは本來その自由に屬するところである。隨つて又一つの系列から他の如何なる系列に移るも全くこの自由である。併しどの系列に於ても一度創造されたる既成數の系列となるときは、凡ての點に於て凡ての數と必然的關係をもたねばならぬ。數が外面的關係に於て必然であると共に、内面的關係に於て自由であるべきことを示すのがこの方程式である。吾々は前節に述べたるところによつてもこれだけのことが考へられるが、この方程式には以上述べたるところによるときは猶ほこれよりも深き意味をもつて居る。yの必然的數系列もこの連續である點から見るときは、

この系列上にある凡ての數それ自身は人格の立場にあるものでなければならぬ。隨つてこのゞ系列を生ずる未知數は人格の個性的系列を生ずるを以て可能となし得べき無限の可能をもつ神の自由その物に於てあるものでなければならぬ。未知數は無限の可能の自由その物であり、總合的普遍に於て人格を生産統一する神その物でなければならぬ。カントルが完全集合に於て數の秩序型を見たことも、デヽキントが數系列の根源に於て、自分の思想世界を見たことも、この自由の可能に於てゞなければならぬのばあつて、前にいつた如く普通の數學に於て見る函數方程式が物を示すものとするときは、自由に於てあるこの式は人格を内にもつ絶對的實在その物を示すものといへるであらう。

この方程式によつても明かなる如く自由に於てある數は物自體として個別的存在の階段的差異を自覺の形式に於てその内に有し、自己の内面から無限の個別的差異の存在を發展すべき特殊化の作用を内面的可能に於てもつて居る。ロッチェが物自體の世界はそれ自身で完結せる世界であつて、吾々の直觀に於ける空間關係に開展すべき叡知的關係をもつものといはねばならぬであらうといつて居るのは、卽ちこれであつて、凡ての分析の極限を越えた自由に於てある數又は實在は凡ての現

象的個別性を內にもつ最も具體的なる實在であり、自己完了體である。勿論自由に於てあるこの數や物自體のもつ叡知的秩序は時間的發展の秩序でない。これを超越したものであるが、この實在は無限の可能を內にもつ點に於て直接時間的秩序に發展すべき內面的必然をそれ自身の中に有し、その叡知的空間に於てもつ特殊的階級の直覺的個性の中に無限の個別的發展の力を藏して居る。この意味に於て自由に於て見らるべき純粹經驗の直接的事實としての物自體では物理的世界に於ける「此處と今」を嚴格なる內面的叡知的關係に於て保存せるものと見ねばならぬのであつて、自由に於てある物の內面には現象的存在の無限の差異を叡知的にもつて居る。物自體はそれ自身では勿論非空間的の叡知的實在であるけれども、その本體的性質上ロッチェもいつた如く空間現象の直觀に對して一定の擴りに開展せねばならぬだけの理由を有せることは承認せねばならぬところであつて、(九)自由がそれ自らを見る內界の事實では、その自覺的叡知的秩序の中に凡ての事實の秩序が根源的に實在せねばならぬ。認識が經驗にまたねばならぬといふことは、もと經驗の雜多といふことは自由の創造によることであつて、その如何なるものが創造せられ、個物が實在するかは先驗的には全く豫想を容れない本體的偶然に屬するからである。併しこ

ゝに既にもいつた如く存在の徹底せる秩序としての豫定調和が見られるのであつて、凡て物の存在及びその秩序といふことは可能の自由に於て徹底する。自由が自己を自覺する場所としての總合的普遍に於て有する本體的秩序の內面的構造に一切の現象的存在の個別的根源を藏する。直覺的世界の現象的形象もこの本體的構造に根源する點に於てそれ自身完結せる獨立體であり得る。

分析の極限でコーエンの$\frac{dy}{dx}$の內面に於て見らるべき微分的實在の內面的叡知的構造は決して簡單なるものではない。事物に於てある元素も內に自由をもつ點に於て內に凡ての事物を作り得べき力をもつ物自體その物であつて、この元素は自由の總合的普遍に統一されたる叡知的空間の個別的階段を全體的同時的に直觀せるものを以て身體とする。元素が凡ての關係に入つて凡ての物を作るが、それ自身不可分的不變的であるといふことは、元素自身が自由に於てあるものとして內に無限の可能の働きをもつ點に於て物自體その物であるからである。元素は內に自由をもつ點に於て自己完了であり、物自體として無限の可能の空間的關係に發展すべき力をそれ自身の中にもつて居る。勿論元素その物をその內に於てある自由から見るときは、如何なるものであるべきかは全く神祕に屬するけれども、既に述べたる如

くその神祕の創造が無限の可能の自由に屬する故に內面的必然的に全體と豫定調和を有し、この調和に於て元素は一切を連續すると共に、一切と一切の關係に於てその可能的變化の一切を限定的に實現する。內に豫定調和を有する必然であるといふことが元素の特色であつて、元素はその內にある自由に於て、自由に於てあるフッサールの直覺的樣相の如く凡てを最も明晰なる直接的自覺に於て結合統一すると共に、その凡てを凡ての個別的方向に向つて一切の關係に於て實現する。この點に於て元素はライプニッツの宇宙であつて、凡ての元素は可能の自由に於て根本的に連續すると共に、內にもつ創造は外にもつ必然によつて實現するものといつてよい。

私は前に今日の化學的元素の原子の構造について述べ、元素は連續でない點について論じたが、自然科學の範圍內に於て考へる限り元素は連續でない。隨つてその間に必然的關係をもつことは不可能であるが、この元素はその分析の一切の極限を越えて自由に直面し、自由に於てある故に內面的必然的に連續すると共に、一切と一切の關係に於てその一切の可能を豫定調和に於て實現する。元素の身體はその內面に於て一切の極限を踏み越えて無限に打ち延ばされたときに直面する自由に於てある叡知的空間であつて、この空間に於て元素は一切をライプニッツの單子の如

く表象の關係に於て有し、その自覺に於て有する內面的秩序の實在を自發的に發展する。元素は內に自覺に於て全體の可能をもつところの名稱自詮の個性として、その全體的豫定調和を一切と一切の關係に於て實現するものである。この點に於て自由に於てある元素はアリストートルのエネルガイアの如きものであり、純粹なる本體としてその叡知的空間に於てある個別的階段的差異を創造的普遍の總合的立場に於て直觀せる自覺的發展の力であるといふことが出來るであらう。物の連續とその內に於てもつエネルガイアの思想は此處に到つて解決されるのである。

私はこの點に於てヘーゲルが自由を以て自覺的實在の本體的力としたことを正當と考へたいと思ふと共に、又ロッチェが Fürsich-Sein 又は Ichheit を以て實在の唯一の定義とする意見に同意したいと思ふ。物は自由に於てある故に凡ての現象的差異を可能の形式で自覺的に內面に有し、而してその自覺の內界では一々の元素のもつ意味が異なるに隨つて實在としての空間性の內面的構造が異なり、それに獨自の特殊世界を內にもつて居る。空間の凡ての點は「此處と今」として凡ての他の點とその性質を異にし、一つの點が凡ての點に對し、凡ての點が又一つの點に對して獨自の立場をもつて居るが、これはその存在の根抵に於てこれ等の點の叡知的空間的關係

が異なり、內界の事實が異なる必然的外面的結果であつて、凡ての現象界に於ける事物の個別的差異は內界事實としての自由の內面的體系の階段的差異から發生する。物理的形像として科學上最も信頼すべきものは「此處と今」に於て示さるべきミンコスキーの世界幾何學の如きものであるが、この機何學は幾つかの極限を踏み越えた自由を以て本體となし、自由に於てある自覺的實在の個性のもつ叡知的體系である。吾々が物理的經驗に於て赤といへば勿論その赤い色について一定の必然的關係をもつて居ることを承認するには違ひないけれども、この色の必然的關係はその內面に於てライプニッツの單子の過ぎ去る條件として表象の關係に映され、自由に於てある創造に屬するものでなければならぬのであつて、色の根源は可能の自由がそれ自身を見る自覺にある。吾々が花を見て赤きを知るが、この赤き色はもと花の內面的實在の自覺的創造に屬するところのものであつて、この創造に於て一つの花が赤色ともなれば又その赤色から創造の內面的必然に基いて青色に變ることもあるが、この他の色に變る點に於て、色は可能の自由を內にもつ豫定調和の大なる目的を實現する個性を發揮して居るのであつて、この豫定調和に於てある個性の發達が宇宙の眞相であつて、自然の齊一及びその變化は本來は只この自由に於てのみ理解

される。

こゝに於てか私は初めて元素の本質卽ち物の本體を考へ得べき立場に達したと思ふ。私は前に元素の意味はライプニッツの作られたる單子に接續する場合に確立する點について述べたが、作られたる單子はその內面に作る單子をもつ點に於て初めて物を連續すると共に、物の存在體系を根本的に創造するが如く、元素もその內面に自由を有するものとして初めて物を連續すると共に、自由の創造每にその連續體系を創造し、その創造の總合的普遍に於て見らるべき叡知的空間の個別的階段に應じて一切の現象的事物の存在體系を新しくする。私はこの點に於て存在及び元素の自由因果律を承認せねばならぬものと思ふ。左右田博士は認識論上當爲の本質に基いて個別的因果律が承認されねばならぬことを主張され、一事件一現象の經過を見てもこのことは同樣に言ひ得ると思ふと附言されて居るが(個別的因果律、哲學雜誌、三七六號、四五―四六)認識論的指導に從ふ物の分析の極限に於ては元素の內面に自由因果律又は個別的因果律が承認されねばならぬのであつて、ロッチェが實在を論じて旣にいつた如く自覺的實在であるといひ、又別に働くことの出來る獨立の形式をもつイデヤであるといつたことは、(二二)創造的總合に於てある自由因果律の實

在を最もよく示したものと見られよう。物の分析の極限に於て考へらるべき微分の內面的構造に於て既に詳論したる如く微分幾何學又は運動の幾何學を考へることが出來るが、この幾何學の極限に於て又吾々は感覺の幾何學を考へることが出來、更にこの極限に於て叡知的幾何學を考へることが出來る。この幾何學の空間を內にもつものが乃ち自由であつて、この自由の中にある叡知的空間で凡ての實在が個別的に創造され、その階段的差異の個性を內にもつ創造的普遍の自由に於て、凡ての實在が內面的連續の關係をもつと共に、徹頭徹尾個別的關係の因果の上に立つ。實在の本來では自由因果律又は個別的因果律でなければならぬのであつて、この因果律の外に物の連續及びその必然的變化考をへることは、實在の本質上吾々に容されて居らぬ。因果律は分析的普遍の抽象的一般性に於て成立するのではなく、總合的普遍の具體的一般性に於て成立するのであつて、一般的必然的因果律は只この自由因果律によつて生じた結果の自然に於ける法則であるに過ぎぬ。

眞の物及び實在はこの自由因果律によつて見る必要がある。既に述べたる如く $A+B$ よりも $x=y$ を以て實在の眞相を示すに足るべき數學原理となさねばならぬ點から見るときは、空間は本來空虛の空間ではなく、凡ての點はそれ〴〵 $Y=f(x)$ なる函

數方程式によつて示さるべき特殊の力を有せるものでなければならぬ。この點に於て空間はその本來的概念に於てユークリット幾何學の空間ではなく、リーマン幾何學の空間でなければならぬ。カントの先驗感覺論の空間論ではユークリット幾何學の絶對的妥當性を主張するために、エルスバッハもいつて居る如く空間の幾何學的特性と重力との關係が注意を喚起するに至つて居るけれども、リーマンの空間(即ち私のいつて居る實在の眞相たるべき$x=y$又は$Y=f(x)$に於て考へらるべき本來的空間からいふときは、空間の幾何學的特質は同時に重力の場を規定せねばならぬのであつて、(三三)空間は本來$Y=f(x)$なる函數方程式によつて示さるべき特殊の實在的力である。私は微分概念を運動の概念に轉廻して物理學の基礎を築いたガリレイ及びこれを完成したニウトンの空間概念も本來はこの空間概念でなければならぬ。隨つてニウトンの運動の三法則中の第一法則たる等速運動の法則は、この空間概念を抽象した空間概念の上に立つ假定であると思ふ。凡での空間は本來リーマン空間の「此處と今」によつて示さるべき內に固有の力をもつ特殊の物理的實在でなければならぬのであるが、この空間の內面には猶ほ叡知的空間があつて、物理的存在の凡ての區別を內に包んで居る。物理的實在を分析してその凡ての極限を越えて內に

無限に延ばして往くときに直面する自由に於てある叡知的空間では、既に述べたる如く凡ての現象的存在の差別的個性をその中に含み、自由の自覺的統一の內面的階段を作つて居るのであつて、この自覺的統一の創造的總合に於て凡ての個性的實在はその背面にある可能の自由によつて連續されると共に、その自由によつて豫定調和に於てある個別的因果律の歷史を作つて居るのである。自然の體系は人格の創造に於てゞなければならぬ。發生するものから見て世界に二つの因果律がある。一般的因果律によつて何處までも機械的に前の狀態から後の狀態を生ずるものと見る自然因果律があると同時に、宇宙論的解釋から見て或る狀態を獨立に初める能力としての自由から起こる因界律があるといふのがカントの宇宙論的見方に對する意見であるが、(一四)機械的に前の狀態から後の狀態に移るについては、この二つの狀態を內に結合するものを豫想せねばならぬのであつて、この點に於て機械的必然は自由に於てあるものでなければならぬ。自由の一義的規定の創造的總合に於て一切の機械作用の根據を生じ、この總合に於ける統一の叡知的關係の中に凡ての現象的形像の物理的差異を發展すべき內面的力を藏して居るのである。一口にいふならば物は凡ての意味に於てその內に於てある自由の發表である。この意味に於て存

在は徹底的に自由因果律であるといへると同時に、ロッチェもいつた如く物は本質に於て當爲實在でなければならぬ。カントが上にあつては星辰、内にあつては道德律といつて讃嘆の聲をこの兩者に對して發したのは、その純粹經驗に於て物の自由と一致した自らなる聲でなければならぬのであつて、この認識及び實在の原理の一致が絶對自由の實在に於て見らるべきことはプラトー及びアリストートルの一致する意見であることは私の既に一言したことであるが、勿論この場合に於て見るところの具體的道德的實在は絶對自由に於てある人格として、凡ての意味で物質的本體を超越してこれをその下にもつものであるから、フッサールのいふ如く凡ての可能的本體論一般の形式を自己の中にもつ形式的本體論の立場にあるものといへるかも知らぬが、(二五)自由に於て凡てを内に包含する本體は、形式といふよりも形式と内容とがライプニッツの自由と單子との如くに完全に結合され、ヘーゲルの實在に於ての如くに形式と内容とが相卽されて形式卽ち内容となれる最も具體的なる個性であつて、一切の可能的區別を自己の中から發生するヘーゲルの die für sich seiende substantielle Macht その物である。一切の世界を内にもつ最も具體的なる全體である。

自然の自然たる所以の特徵をなす機械的必然は自由に於てある所産である。自

然はその外面的機械作用では全く一般的必然的であつて、凡ての存在はこの一般的因果律の支配する機械作用の體系の中に織り込まれて一つもこれを脱するものはない。隨つてこの點より見れば自然には一つも飛躍を許さぬ。全く機械的必然の一般的因果法則に從ふ變化あるのみであるが、この一般的必然的法則は自由に於て成立するのである。自然的必然は自由を豫想する。ロッチェはミクロコスモスの初めに於て機械的必然の性質を論じて、機械的法則の絶對的妥當性は有限的現實の凡ての部分が有限その物の範圍内に於て規定的原因により普遍的法則に從つて生せねばならぬにあるのではなく、一度有限的現實にもち來たされたるものは、どの部分もこの法則に從つて何處までも働いて往かねばならぬにあるのであるといひ、後にミクロコスモスの終りに於て既に述べた自覺的實在の自由創造を以て存在の根源として居るが、存在は既に述べたる如く自由に於て連續すると共に、自由に於て凡ての體系の維持及び整理を得て居るのであつて、自由の一義的規定の創造的總合に於て實在の豫定調和と機械的必然、非合理性と合理性とが完全に調和し、豫定調和に於てある機械的必然となつて居る。存在ではこの點に於て機械的必然は豫定調和を實現する唯一の科學的方法となつて居るのであつて自由の創造的總合の場面た

る叙知的空間に、豫定調和に於てある機械的必然の關係が最も原始的狀態で見られる。物自體の內面的構造が是れであることは私の既に述べたるところであつて、自由は凡ての存在の內面的に於てある創造的總合の唯一の力として、內に個別的發展の一切の根源を藏し、無限の可能に於て個性を創造すると同時に發展せしむる。自由に於ては、既に述べたるごとく自覺するといふことは一切の世界を創造することであるが、この創造は自由に於ては同時に發展であつて、こゝにヘーゲルのいつた如く世界の究竟目的が精神の自由意識であり、隨つて又自由の現實であるといふことが內面的必然となる。

一一

一體普通發達又は發展といふときは漸次的階段を踏む向上的轉化を意味する。舊狀態から連續的目的々に新狀態に向上することをいふのである。併しかく一つの狀態から次ぎの狀態に移るについては、既にもいつた如く第一この二つの狀態を超越してこれを內に結合するものがなければならぬであり、機械的關係の總和の極限を踏み越えて自由の創造へ躍進せねばならぬ筈であつて、この創造に於て無限の可能の自由でその一義的規定によつて自己を自覺するとき凡ての意味で新狀態が

生れ、その新狀態の中へ舊狀態が變化せる狀態で包攝されて往く。これが普通にいふところの連續的發達に外ならぬのである。このことは既に述べた$Y=f(x)$の創造的系列を見ても明かなることである。この方程式では既に論じた如く絶對自由の創造が根抵となり、凡ての數系列をこれによつて新しくすることを最も具體的に示して居る。創造ごとに數系列の各數が人格の立場に於て獨立的個性として新しくなるべきことを示すのが元來この方程式であつて、その系數の中には自由の創造ごとに人格が函數關係によつて示さるべき存在體系を新にすべきことを一般に表示する眞理を含んで居る。この意味に於てこの函數方程式によつて示さるべき存在體系の內面にはベルグソンの純粹持續がなければならぬのであつて、この持續も內にもつライプニッツの無限の可能の自由卽ち神がその創造以前に於てもつところの全體の自由、創造をも內容とするところの神の究竟的自由に於て、自然は究竟的意味で連續すると同時に、無限の個別的發展をなすべき絶對的根據を有する。凡て物の初めはAからBが生まれるいふやうな意味で一つのものから他のものが生ずるのではなく、全く古きものが消え失せて新しきものが生ずるのである。ライプニッツは單子の存在は凡て倏忽的である。卽ち創造によつて初まり絶滅によつて終る

といつて居るが、物(一七)の存在はの究竟に於ては、倏忽である。創造によつて初まり絶滅によつて終るものであるが、この創造が可能の自由に於てある故に一つの創造の中にも凡てのものを置き、絶滅せる古きものをも新しき形式に於て包含し、連續的に發展することが出來、既にもいつた如く全體の豫定調和に於て個別的發展をする。物の維持及び發達は自由に於てする外ないのであつて、物は自由に於て連續して物の體系をもつと共に、常に新しき體系に於て新しき物理的經濟を作る。正直にいへば物は本來自由に於てある故に物たるを得ると共に、その創造の各瞬間毎に前に述べた函數方程式によつて示さるべき物理的經濟の存在體系を異にし、異なれる個別的體系の困果關係によつて個性的に自由の歴史を作るを得るのである。

この點に於て宇宙は既にいつた如く自由の現實たるべきものであつて、個物の無限多であるといふことは異なれる方法によつて實現すべき文化の内容が無限に豐富であるといふことに見られるのであらう。神の自由に於て可能の單子を見るといふことは、この文化の根源が無限であるといふことであり、人格の個性的發展の根源が無限であるといふことであつて、有限的人格はその内にある無限的人格たる神の創造によつて自然に新しき價値の體系となし、これを自己の生活の中に織り込ん

で往く。即ち人格はその內面的創造の各瞬間ごとに自由因果律によつて自己の生活の個性的歷史の手段を自然の中に作つて往くのである。自然は自由によつて歷史となるときに、一般的必然的因果律の抽象的立場より自由因果律の具體的人格的立場の價値に發展する。人格の立場に於て連續せる自然は一切が一切に於てあるものとして、最も具體的なる全體的價値を內含するものといはれるであらう。$Y=f(x)$ に於て凡ての數系列の要素を以て人格とするとき、この系列がその中に映されたる場合の數要素にはいはゞ神來の藝術的統一ともいふべきものがある。自然が創造每に新體系の實在となり、新しき意味の個性としてその中に無限の力を得るといふことは本來は只この場合の Y を x の中に映した絕對的自由に於て見られるのみであつて、この自由に於ては一つの實在も全體の可能を含む意味に於て永久である。現在が永久の全體であつて、その無限の可能の自由にはフッサールの直覺的所與性の樣相をの直接的內容として創造し、自覺的構成を以て本質的活動として凡ての事物をその內面から發生すべき理由を有して居る。$Y=f(x)$ なる函數方程式はこの理由を最も明かに語るものであつて、ロッチェの働くことの出來る獨立の形式をもつイデヤ又は自覺的實在といふことも、畢竟この方程式によつて示さるべき自由

の直覺的創造活動をいふものと見ることが出來るであらう。フッサールの樣相に於て働くライプニッツの可能の自由をいふものと見られるであらう。ライプニッツの可能の自由に於てある叡知的空間に實在の根源的體系を見るのがロッチェである。

實在を物の內面に於てある關係の全體、無限の可能としての自由に求めねばならぬ分析の眞理からいふときは、元素は物に於てあると共に物を內にもつものであつて、その於てある自由の創造的總合の內面的統一には存在の有すべき一切の形態の階段的差別が直覺されて居るのみでなく、この階段的差別を內にもつ全體も亦直覺されて居る。Yとxとを內にもつxの立場に於てはYの系列中に於ける凡ての階段的差異の數を直覺するものと考へられるのみでなく、このYの系列を內にもつxその物をも可能の自由に於て直覺として居るものと考へられると同一であつて、可能の自由には無限の形態の物を內にもつ我を永久の創造及び進化 ever recreation and evolution の形に於て發生すべき力がある。自己を見る可能の自由が我及び物の初めである。自覺的實在が自我と非我との對立の可能の根抵であるといふのがロッチェのミクロコスモスに於ける根本的哲學的見解であるが、ライプニッツの神の無限

の可能の自由としての最高の單子では、作られたる單子を意識すると共にの內容を意識し、その創造的總合に於て凡ての我及びその對象を意識して居る。作られたる單子も內に物をもつ創造的總合の立場に立つ自由の力であるには違ひないが、この單子を內面にもつ無限の可能の自由に於ては單子の創造的總合が意識され、その自己意識の中に世界全體の凡ての存在が個別的階段的に直覺されて居るものと考へらる。眞に自覺的なるものは無限の可能に於て、非我を內にもつ自我を創造する自由である。こゝに至つてはフィヒテの「事行」があるのみであつて、我が我を定立する點に於て凡ての實在が定立せられる。物の分析の內に於て見らるべき可能の自由はかゝる我でなければならぬのであつて、この物の內面でフィヒテの我が我を創造し、我の中に於て物を創造する絕對自由に物の根源がある。この自由の自覺的創造の內に見る總合的普遍に於て見らるべきロッチェの形而上學的叡知的空間性に、凡ての物の實在が根本的典型の創造せられるのである。前回に述べたやうなカントルの秩序型もこの自由に映して考へるとき哲學的思想として意味あるものであると考へられるが、フィヒテの絕對自我の自由に於ては創造もその內容であり、直覺的樣相も勿論特殊的のものでなければならぬ。眞に一般的なものは創造を內にもつ

ライプニッツの可能の自由あるのみであつて、その創造的總合に於ける內面的統一の普遍こそは、凡ての意味に於て凡てのものを創造する全體である。實在はこの自由に於てある限り自覺的全體であるといへる。

神に於て有限的人格の思想が全體的意味をもち、これによつて特殊內容の限定的思想が全體的世界と關係に於て立つを得るといふことは、ロッチェもいつて居る如く神の思想が有限的精神に世界の直觀を成立せしむべき力であるからであつて、物(一九)は自由に於てある限り凡ての意味で全體たることを得る。我の體驗では凡ての體驗「今」がその前の體驗と結合せねばならぬ。この結合に於て吾々は眞の我を見ることが出來るのであるが、この結合は全體を內にもつ可能の自由に於てある我に於てのみ考へ得らるべきものであつて、我はその內面に神の無限の可能の自由をもつ點に於て凡ての連續の中心となり、その一つの體驗にも豫定調和の全體の結果を含むから、その創造は凡ての新しき初めを作るに拘らず、過去の結果を新しき形式として現在の中に總合し、その現在から一切の未來を作つて往くことが出來る。フッサールが各の體驗「今」は必然的に過去の水平線をもつて居るが、この水平線は內容のない空虛のものではなく、「過ぎ去れる今」なる意味を有せるものであるといつて居る。(二〇)

卽ち過去は新しき意味に於て現在に創造されることをいつて居るのであるが、これは一つの體驗も全體の結果を含む可能の自由の現在に於てのみ可能のことであつて、無限の可能の自由の現在に於ては過去現在未來の三つの體驗が一つに重つて居る。時に於ては一度過ぎ去つたものは永久に過ぎ去つたものである。併しかく現在から過去に過ぎ去る時の連續の內面には永久の現在がなければならぬのであつて、この現在に於ては過去も一つの「今」である。この過去が現在に包まれ、未來も亦現在に含まれて居る三つの時の重疊せる「今」こそは卽ち凡てを同時的に內に於て見る絕對であつて、その中に凡ての存在及び發展の根源をもつて居る。ベルグソンの純粹持續を內にもつライプニッツの可能の自由が凡ての發達の根源である。この自由の一義的規定に於て見る創造的總合では旣に述べたる如く自覺の形に於て物自體のもつ一切の內面的秩序が創造され、凡ての物の現象的關係の根源が創造される。

自由に於てあるデ、キントの「自分の思想世界」もカントルの秩序型もこの可能の自由の永久の現在に於て創造されるものでなければならぬのであつて、こゝに初めて數概念が運動概念に轉廻して微分幾何學を作るべき理由も根本的に理解される。

數は所詮前に述べたY=f(x)の形而上學的自由に於て理解さるべきものである。

數は今日多數の學者の見るところと反對に、先驗的超越的一般でなく、この一般をも特殊の立場に轉廻してこれを內にもつ眞の一般者たる可能の自由の創造的總合的普遍である。こゝに數理が凡ての實在に內面的必然的に妥當すべき理由をもつて居るのであつて、數は內界の直接的事實としては最も具體的根本的なる實在的力である。この點に於て數はヘーゲルの概念の如きものといへよう。ヘーゲルの概念は事物その物の客觀的本質である。氏の概念は主觀的表象であることは勿論であるが、表象されたるものではなく、表象するものであるといふ意味に於てライプニッツの單子の如く凡ての關係を表象に於てもつ實在であり、自覺的實在的力として凡ての物の根源をなすものであるが、數もこれと同じく、自由に於てある數はデ、キントの「自分の思想世界」として凡ての物の關係を表象に於てもつ實在であり、豫定調和に於てあるカントルの秩序型である。ピタゴラスが物を以て數の寫象と考へ、世界は數と調和とである、數は實在であつて、その秩序性が物の本質を規定するものと考へたことは深き理由あることである。$A+B$ではなく $x=y$ を以て實在の眞相を示さねばならぬ世界に於て、$Y=f(x)$ を以て實在の最も根本的なるものを示すものと考へねばならぬ哲學に於ては、私はピタゴラスのこの言葉は正確に承認さるべきも

のと考へ、フッサールの直覺的樣相を自由に於て映し、その創造的總合に於てある實在を最も具體的に示すべきこの函數方程式には古今の哲學上の眞理が流れて居るものと思惟する。ロッチェが自由に於てある叡知的空間性に實在の根本的形式を求め、自我又は自覺的實在を以て實在の根本的なるものとなし、これを以てミクロコスモスの根本思想としたことも矢張これと同じ思想であつて、ヘーゲルが自由を以て何物も抵抗することの出來ない實在の王位に登せたといふことは、(二二)つまりは哲學者の同じ究竟の地たる自由に於て實在の解決をなした最も著しき例と見るべきであらう。カントが上にある星辰を內にある道德律と同じように嚴肅莊重の念を以て觀たやうに、物の分析に徹底してその本質を突き止めねばならぬ吾々科學者にも矢張自由に於て物を見、その總合的普遍に於ける叡知的空間性の概念に徹底して、明かに $Y=f(x)$ に於て物を見、その創造的總合の發展を突き止めねばならぬ必要がある。自然を文化に轉廻して歷史を作るべき工業並びに工業家たるべきものゝ性格には、物の分析の極限にまで徹底して自由を體驗し、純粹經驗に於てある內界の事實としての $Y=f(x)$ に於ける創造的總合から現實を見るを要するであらう。フッサールは各種類の個別的存在は一般的に偶然といふの外なく、その本質上他のもので

り得ぬとはいへぬといつて居るが、存在[三二]の內面にある自由の創造に於ては凡て先驗的論理を以て如何ともすること能はざる偶然であるけれども、自由その物の創造に於ては內面的必然的であつて、その總合的普遍に於て見るところの$Y=f(x)$に於ては、凡ての創造が豫定調和に於て機械的必然と最もよく調和せることを示すに足るものがある。全體の豫定調和の內面的必然の創造によつて一切が一切と一切の可能的關係に於て立ち、自由が自然的必然の世界に身體化すべき唯一の理由を示すのがこの式であつて、この式の中に吾々は人格及びそのもつべき事物の合理的性質を最もよく知るに足るべきものがある。赤い色も承に述べた如く函數方程式によつて表はさるべきものであるが、この方程式は既に詳しく論じて來たやうに自由に於てある變化の系列を示すものである。$Y=f(x)$に於けるを超越してこれを內に生ずる絕對自由に於て、Yとxとを內にもつ絕對創造のxを示すのがこの方程式の極意であつて、この外に物の連續も又その變化も考へられることは私の既に述べた所である。吾々のは只この自由に於てのみこれを考へ、存在及び發展の根源を考へ得るのみである。Yを內にもつxを又內にもつ絕對自由のxに於て、實在及びその發展無限の根源のあるべきことを吾々はこの方程式に於て見ねばならぬ。自由の一義的

限定の創造的總合の多樣の內面的統一を示すのがこの方程式の最後の意味であつて、この式の中には物及びその發達を最も根本的圖式に於て窺はしむべき眞理がある。

この方程式に於て見らるゝ如く存在がその內面に於て凡ての極限を越えて無限に打ち延ばされたとき直面する自由に於てある身體では、その叡知的空間關係に於て物理的身體のもつべき一切の個別的差異性を有し、一切の事實的特質を生ずべき根源を可能の自由の內に於てもつて居る。この自由に於てはそれ自身を見る自覺が、ライプニッツの單子の如く表象の關係に於て凡ての實在を內にもつことであり、自覺に於て表象をもつといふことは實在を作ることであれば、又それ自身を身體化することである。自由に於てはその自覺に於て對象を作り感覺をもつといふことはヘーゲルの考へて居るやうに自己を身體化することでなければならぬのであつて、(一三)そこには既に詳しく論じたる如くライプニッツの可能の自由に於てあるフッサールの直覺的樣相又はロッチェの叡知的空間性に於て見るやうに最も根源的に凡ての個別的發展の原因を藏して居る。自己を見る自覺的自由が凡ての個別的存在の根源を作る實在的力である。物の連續及び變化の最も具體的なる根源はこゝに

あるのであつて、實在の最も根本的なる法則たる自由因果律はこの身體發生の法則である。この因果律は實在の直接的內界の事實としての自由の創造的總合の豫定調和に基く現實化個別化の法則であつて、存在のこの法則による身體化にはその根抵に於て必らず創造的飛躍をもつて居る。結果は原因と異れる創造の初めをもたねばならぬのであつて、實在の直接的事實ではその身體化の各階段に於て創造の新しき初めをもち、その新しき初めに於て古きものを新しき形式で包含するために、實は既にも、いつた如く連續的に進化するを得、實體概念が現實概念となり、自由の自意識としての個別的現實世界の實現が見られるのである。

偖、私は以上身體生活の機械作用の分析から元素その物の研究に移り、元素の內面に於てある實在の內面的構造を說き、自由の自覺的發展構成力を明かにした。勿論以上述べたところは元素の內面的分析に於てその內にある構造力を發見したるに止まつて居るから、哲學上から見れば論ずべき問題であつて論じてないものゝあることは斷る迄もない。私は後に論題の改まつた際この缺點を補つて往く積りであるが、以上述べたるところで私は極く大體ではあるが、身體生活の機械作用の根源を突き止めることだけは出來たでないかと思ふ。私はこれから次ぎの新問題に移ら

ねばならぬが、それよりも以前に私の全體的構想上に於ける以上の研究の價値を明かにするため、便宜上なほ簡單に以上の研究を一瞥の下に纒めて見たいと思ふ。偖、既に述べたるが如くであるから、私のこれ迄の研究は結局コーエンのφxの内面に於て考へらるべき叙知的空間に於てある「此處と今」を吟味して、物理的形像の根抵を明かにしたものといへよう。今日數學及び物理學界で有名なるワイルが「此處と今」の「ひずみ」に物質を求めたることは既に述べたが、認識論的指導に從ふ分析に於ては、この「此處と今」はなほその内面に於て幾多の極限を越えて分析を進めねばならぬものがあつて、私は凡ての極限を越えてこれを内面に向つて無限に打ち延ばしライプニッツの無限の可能の自由に達して、その中に於てある叙知的空間の「此處と今」の内面的構造を窺ひ、氏の自由に於てあるロッチェの形而上學的空間性に於て物及び形態の根源を見た。内に無限の働きを有する特殊的實在としての元素は、ライプニッツの自由に於てあるロッチェの空間性又はフッサールの樣相の如きものでなければならぬのであつて、この點に於て自然はヘーゲルの自然哲學に於て見るやうに凡て合理的實在であるといはねばならぬ。隨つて吾々の身體もこの實在を内にもつ自己完了の合理的實在であるといはねばならぬ。哲學が生活を深めるといふことは、

この點から見ればその內面に於てある實在の合理性の根抵に分け入つて自由の創造的總合に於て見る諸相を明かにすることであると考へられるであらう。

併しこれは本體論宇宙論に於ていふことであつて、この論に於ては存在はその內界の事實としては自由であることを承認せねばならぬけれども、この自由が意識と如何なる關係に於て立つか、以上の研究ではなほ全く不明の問題であるのみならず、自由の創造的總合が個物殊に人體に於て如何に働いて居るか、物の構造を自由に於てある物自體に見る以上の宇宙論的形而上學的說明だけではこの問題は未だ判らぬ問題である。既に述べた如く自由は物の維持及び整理の根抵であるが、この自由はその於てある所の內界の直接的事實に於けると異なり、個物に於ては派生的に働き、同じ進化の自由原理によつて躍進しながらも個物はその特殊の法則に從つて直接その生活に必要なるエネルギーを得て居るのである。吾々は生活の機械作用の分析によつて元素の意味を明かにし、dxの內面に絕對自由の構成活動を見、生活の根源及びその發達を見たからといつて、それが直ちに個生物體の生活の說明とはならぬ上に、ワイズマン自身も既に注意して區別したやうに、宇宙の永久生命と胚種の永久生活とは別の問題であつて、宇宙論に於ける永久生活の議論は發生論の證明には

ならぬ。認識論上eidetischの問題はfaktischの問題を解くに足るには違ひないが、genetischの問題には觸れぬ。こゝに廣き意味に於て生物學及び人性學の問題が横つて居る上に、一體このeidetischなるヘーゲルの自然哲學に於て見る如き自然、ヘーゲル自身の言葉でいふならば、自然は自覺せる形式のイデヤである、それ自身生命のある全體であるといふやうな自然と、(二四)現實的自然との間には何人も知れる如く大なる事實上の相違があつて、ヘーゲルの自然哲學の難物となつて居る。吾々はこれ等の問題を如何に解すべきか。生活の具體的理解からいへばこの新問題の方が寧ろ重要なる問題である。多くの學者はこの新問題について研究を積まず、只生活の一般的機械作用の分析からその中にある目的の發見を以て直ちに生活の理解を得たるものと想像し、これを以て教育學の原理とするとか教育の目的を決定するとかするけれども、これは早計な話であつて、本質上社會進化に於てあるべき人間の教育を以て宇宙進化と同樣に見る誤謬に陷り、元來具體的なるべき教育及び教育學を以て抽象的となし、實質上これを以て宇宙形而上學たらしめる恐れがある。これは甚だ遺憾なことである。故に私は以上論じ來つた本體論的宇宙論的研究から進んで次ぎに生物學的及び人性論的研究に移り、生活の具體的輪廓を描いて、それから教育の原理に論

及しようと思ふ。大體に於て私の研究は哲學上では人體を自由に於て見る關係上、所詮カントの目的論を離れるものではないが、私は先づ身體に於ける物質の變化から吟味して、生活の自由の創造的總合及び現實の問題を今少し明かにして置きたい。

(一) Lotze—Metaphysik, s. 161
(二) Hegel—Encyclopädie d. ph. Wissenschaften, § 387
(三) Bühler—Gestaltwahrnehmung, s. 5—31
(四) Lotze—Op. cit., s. 152
(五) Leibnitz—Monadology, § 43
(六) Lotze—Mikrokosmos, III, s. 466
(七) Philosophical Classics, Leibnitz, P. 69&73
(八) Lotze—Metaphysik, s. 205
(九) 〃　〃　s. 206
(〇) Hegel—Op. cit., § 160
(一) Lotze—Mikrokosmos, III, s. 531
(二) 〃　〃　II, s. 158
(三) Elsbach—Kant und Einstein, s. 120
(四) Kant—Sämtliche Werke, I, s, 469
(五) Husserl—Ideen z. e. r. Phänomenologie und phän. Philosophie, I s. 22
(六) Lotze—Mikrokosmos, I, s. 293

(廿七) Leibnitz—Monadology, § 6
(廿八) Lotze—Op. cit., III, s. 575
(廿九) 〃 〃 s. 529
(卅〇) Husserl—Op. cit., s. 164
(卅一) Hegel—Phänomenologie des Geistes, s. 380
(卅二) Husserl—Op. cit., s. 9
(卅三) Hegel—Encyclopädie, § 401
(卅四) 〃 〃 § 247 & 251

前稿訂正

頁	行	誤	正
八五	一四	nの	その
九一	八	概念内面	概念の内面
九七	一三	區に	區別に
一〇六	四	機相	樣相
一〇六	一五	完的	完全
一〇九	三	觀照	觀點
一一二	一	單なる	單子の
一一四	五	豫想	豫定
一一七	一四		s. 104